

第4回札幌市まちづくり戦略ビジョン審議会 議事録

〔 日時 平成24年1月23日(月) 13:30~16:30
会場 ホテル札幌ガーデンパレス 2階 孔雀 〕

1 開会案内

2 議事

(1) 前回の審議の振り返りについて

資料1について、事務局から説明

(2) 基本目標・基本的視点について

資料2-1~資料2-2について、事務局から説明

<内田会長>

今日、大体の方針が見えてくるとそれをベースに進めていくことになる。それを踏まえて資料をお目通しの上、ご質問、ご意見を賜りたい。

<丸山委員>

資料2-1、2-2を確認するに当たって、補足説明をいただきたい。資料2-2を図式化したものが2-1という読み解き方でよいのか。その場合、どの部分を読んだものが図のどこに反映されているのか補足してほしい。

<稲木企画課長>

資料2-2は基本目標が大きく7項目で位置づけている。このうち、前文には「地域」と「経済」が重要であり、他分野と密接に関わるものとして記載している。

図面の中心部分はそういう意図から持続可能なまちづくりを支えるための「地域」と「経済」を重要な分野として特筆している。それ以外は「地域」と「経済」に密接に関わる重要な分野として配置している。

中心の緑色の丸から各分野に出ているそれぞれの矢印は経済・地域との関わりを記載している。例えば「地域」のところでは、真ん中に「安心して暮らせるまちづくりを支える地域コミュニティ」と記載している。同様に「経済」についても、「市民の活力あふれる街を支える経済の発展」としている。これらが資料2-2の「将来のまちの姿」を要約したものとなっている。

<内田会長>

端的には基本目標の構造として6つの項目があり、それぞれに対応するものとして都市空間というもの位置づけていると理解している。これらの一つ一つが資料2-2の7つの基本目標の内容に対応しているということになる。

<丸山委員>

資料2-2の1番目にある「地域で支えあい、つながりが生まれるまちづくり」が、図中の「地域」に対応しているということによいのか。

<稲木企画課長>

1の「地域支えあい、つながり生まれるまちづくり」が「地域」、2が「経済」、3が「次世代」、4は「安全・安心」、5が「環境・エネルギー」、6が「創造・文化」、7が「都市空間」に該当している。

<丸山委員>

抜き出した文言が資料2-2のどこに対応しているのかが分かりづらいと感じた。資料2-2の標題をそのまま使わなかった理由を含めて確認したかったのでお伺いした。

<浅香委員>

資料2-1の「安全・安心」と中心をつなぐ青い矢印に、「ビジネスの視点を取り入れた持続可能なサービスの提供」とある。「ビジネスを視点とした」というのはどういうことを指すのか。

大きな項目で経済、地域とあるので、これに対応したものとは思うが、「安全・安心」というテーマに対して「ビジネス」という既述があるのは不自然に感じている。「安全・安心」は、前回もどなたかがおっしゃっていたが、人を動かすことが主であり、ここにだけ敢えて「ビジネス」という言葉が出てくることに違和感を感じる。

<浅村計画担当課長>

イメージ図のところで、「経済」、「地域」という中心的なテーマに対して、「安全・安心」の関わり の例示として記載したものにビジネスの視点という記載を入れている。

この趣旨としては、近年、様々な地域的・社会的課題を解決するためのビジネスモデルとして「ソーシャルビジネス」という視点が出てきている。従来、公共が担ってきた部分ではあるが、今日では様々な市民ニーズのバラエティが生まれつつあり、これらが「安全・安心」ということにも関わっている。ビジネス戦略の視点を幅広く取り入れることもこれからのまちづくりの戦略としては非常に重要と考えて例示させていただいている。一方では全てをビジネスという視点から捉えるということはい意図しているわけではないということをご理解いただきたい。

<梶井委員>

資料2-2にある「将来を担う子ども・若者が健やかに成長できる環境づくり」が「次世代」に対応しているとのことだったが、矢印の記載を見ると、強い市民的責任を担う次世代を育てるという趣旨であると理解している。

ただし、地域に関連した次世代ということだとすると、様々な弱者、力のある人もそれに見合った形で地域貢献していくのだという包摂感が重要だと思っている。今の内容ではその包摂感が読み取れないと思う。「地域運営を支える人材育成」というよりは「地域を支える多様な人材の育成」という形で包摂的な表現にすべきではないか。

<浅村計画担当課長>

資料2-1については、最終的には資料2-2を図化するものになると思っている。概要的な図としてのフィードバックを最終的に行うということをご理解いただきたい。

重点戦略の中でも社会的包摂の考え方は強く打ち出していきたいと考えており、それを踏まえて基本目標の個別の記載も改めていきたい。

<杉岡委員>

包摂のところで、私も同様の考え方を持っている。ボランティアな活動と経済的なビジネスに特化していく活動の連続性を考える必要がある。

今まで雇用の中に組み込まれてこなかった人材に対する就業機会の提供、地域貢献機会の提供など、社会との接続機会を与えていくことが重要であり、全般的には複数の人によって関係が構築されるようなことが国の方針としても重要になっていると思う。

たくさんの方が働ける環境を構築することが重要だとすると、いわゆる非営利的な活動のビジネスへの転化、高齢者の消費活動、障がい者の社会参加も地域における健全な経済成長につながるという視点を含めて考えるべきではないか。単に高齢者が地域のまちづくり活動にボランティアに専念していくということでは経済の活性化に問題を残すことになるのではないかと感じている。

<浅村計画担当課長>

杉岡先生のおっしゃったことは非常に重要な視点であると考えている。従来、「ボランティア」として考えてきたことと、「雇用」という枠組みで考えられていたものが対抗概念として捉えられてきたが、そこがシームレスになっていく可能性が重要だと捉えている。社会参加と経済成長の結びつきが、その人の持ちえる能力、社会的環境、その他様々な条件に応じて、どこのポジションに着くかは多様性があると思っている。それが社会的包摂という概念に包含されてくるのではないか。

実態的に都市の中でどう展開されるか、市民一人一人がどういう部分に関わっていけるかという部分をリアリティを持って考えなければならない。こうした内容については重点戦略の中で十分に詳しい議論をしていただきたいと考えている。本日の基本目標の議論の中でこれからの議論のための視点を十分に認識させていただき、全体のトーンとして守るべき考え方をもち続けていきたい。

<内田会長>

今の話は必ず出てくる話題である。「ボランティア、支援、保護」という考え方は対象者が受身になっている。

身障者の方々が親切にしてもらうことについては嬉しいということになるのであろうが、一方では自分達が社会参加の意識を持っていたいと思っているであろうし、そういう観点では杉岡先生の視点は大事にしたいと思う。

例えば、私がよく取り上げる例として、極端な話ではあるが、身障者の方がお化粧をすると、それは公的な支援のお金をもらってのことなので気持ちが委縮するという話を聞いたことがある。ところが、それが自分の労働の対価であれば自由に使うことができ、気持ちが萎縮しない、つまりマーケットに参加することができるのではないか。

マーケットというのは必ずしも競争社会のことを指すわけではなく、対価がもらえるところに参加できる仕組みが最も重要である。「保護する、援護する」という考え方は我々から発信する考え方であり、受け手からみるとそれもありがたいが、自分が社会の一員であるという意識を持てることが生活の支えになり、非常に大切な考え方だと思う。

ボランティアも大切だが、その人たちを引き出す、社会に参加できる仕組みを作るべきである。バブルの時はそれが可能であったし、札幌市も地下街等にろうあ者のための店があった時期があった。社会的に余裕がなくなることで、そういう取組みがなくなってしまった。経済成長がそういうところに行き渡ることが重要である。

<浅村計画担当課長>

追加になるが、基本目標の実現にあたっての視点に「共生」というキーワードを掲げており、この部分が社会的包摂の考え方を内包し、一人一人が社会の一員として参加していくまちづくりを進めるという視点を持っていきたいと考えている。

<志済委員>

質問になるが、基本目標の中に数値的なものがどの程度含まれるのか。過去のビジョンから計画に落としていく段階では、ある程度の数値目標を設定することも必要だと考えている。

重点戦略の中で設定するというのであればそれでよいと思うが、経済においても日本を代表する産業をいくつ生み出していくのか、アジアや外国の観光客を年間どのくらい伸ばしていくのか、エネルギーで言うと自立したエネルギーを何%もつなど、ある程度KPI（重要業績評価指標）のようなものがあると施策としても具体的なものになるのではないかと。

こうしたものが後の工程で設定されているのか、基本目標の中であるべき姿として設定するものになるのか。

<可児政策企画部長>

基本目標に数値目標はなじまないのではないかと事務局は考えている。一方で、重点戦略としてはそうしたものを含めていく必要があると考えている。審議会としてどういう構成を採るべきかご意見があれば、反映していきたいと思う。

<内田会長>

数値目標はこの段階で掲げるべきかどうかということであるが、数値目標をすべてに掲げる必要があるのか、一部に挙げるのかというようにステップアップする議論になると思っている。

私としては、市がまちづくりを進めるための基本的な目標、考え方を確認するためのものだと理解している。実際に計画を立てる際に必要なものがあれば、そこで数値設定をするということを考えていきたいと思う。

<為定委員>

資料2-2、参考資料の素案を見ると、これは起草イメージだと思うが、現状に対する認識、ビジョンを作る背景となる部分の記述が少ないと思う。他の政令市との比較、札幌市の取るべきスタンス

がもう少し触れられていないと、市民が今の札幌の状況を把握できないのではないかと。それがないと理想論だけを語っているように見えてしまう。

現状の数値を含めて、読者の理解を深め、その上で基本目標を掲げるべきではないか。現状の資料 2-2 は内容としては正しいが、札幌という言葉を取ると、どこの自治体でも通用するものになると感じる。正確に札幌の現状分析を基本目標の中で行った上で目標設定しないことには、顔の見える計画にならないと思っている。

<可児政策企画部長>

事務局としてはご指摘を受けた部分を理解したうえで作業しているため、欠落してしまっているかもしれない。修正すべきと再認識した。

<内田会長>

現状分析をした上で、これからの 10 年間の取組を議論することはかなり厳しい議論になると思うが、札幌市がどういうところに強みを持っているかということも含め、現状を把握することは重要である。

<田村委員>

資料 2-1 について、一般市民には絶対分らないと思う。特に分らない部分としては、地域、経済という大きな視点と、それに関連する 4 つの分野、そして受け皿となる都市空間と、基本目標が実は 3 層になっているということである。

十年前の計画と今の計画の何が変わってきたかということ、行政が小さくなってきたことがある。小さな行政になってきたはずだが、そこで行政が上から目線で経済や地域のことを書いているところが非常にギクシャクしているのではないかと。

内田先生が最初の議論でおっしゃっていた「取捨選択」の中で、何を捨てるのかということが明確に書かれていないと思う。地域や経済の部分についても、行政のもっているお金がいくらで、これしかできない。ついては、残りの部分については市民や企業によるしくお願ひしたいということを書くべき部分なのではないか。

為定さんがおっしゃったように、今回の計画の重要なポイントは経済や地域にあると思う。ところがこの計画の構図では、こうした基本目標の考え方と重点戦略の結びつきが見えづらく、それを市民に説明し続けることは非常に難しいのではないかと。経済、地域の担い手が行政ではなく、市民だというメッセージを早い段階で打ち出していくべきだろうと思っている。

もうひとつお話ししたいのは、自分達の集まりが「まちづくり戦略ビジョン」ということで、「まちづくり」と「戦略」ということを担っているが、「まちづくり」という言葉が乱用されている。どこが重要だというキーワードが伝わってこないと感じた。これは最後の起草の段階で良いのだと思うが気をつける必要がある。

<浅村計画担当課長>

今回のビジョン策定にあたって、単なる行政計画ではなく市民や企業、札幌のまちに関わる担い手の方々と共有していくというメッセージは色濃く出していきたいと思う。表現が上から目線という指

摘であったが、そう受け取られるのであれば、それについては十分に対応を考えていきたい。

全体の構成としてどこで役割分担に触れていくかは、何箇所かで触れていくことで従来の行政計画と一線を画するものだというメッセージは明確に打ち出していきたいと思う。また、キーワードの統一感は起草にあたっては十分に配慮していきたい。

<内田会長>

一番のポイントなのだと思うが、行政としては色々な市民からの注文が来るのが実情である。それは市民一人一人が感じる想いであり、それを札幌全体としてどう捉えるべきかは市民は理解できないと思っている。そうしたものをメッセージとしてきちんと伝えていくことがこの計画の役割なのではないか。

その場合に札幌市が全部やるのではなく、市民と協働でやっていくということは明確に打ち出していくべきである。今の行政予算の中で市のやれることは限られているのが実情であり、考え方、視点としてビジョンを持つべきで、これら全てを行政が担うものではなく、計画に掲げたものが行政の責任ではないと思う。

課題・問題点を理解した上で、直近に取り組んでいくべきもの、緊急を要するものを詰めていくことになるのではないか。

<池田委員>

昨年来、色々な場面でまちづくりのテーマを出してみたのだが、札幌がどういうことをやるか。資料2-1を見ると「地域」と「創造・文化」を入れ替えたほうが札幌らしいまちづくりに向かっていけるのではないかと感じた。

一言で札幌のまちづくりの方向性を表現するときに、札幌は「経済成長」と「創造・文化」をテーマにやっていく。「地域」の取組はどこでも取り組んでいくことではないかと大胆に考えることもあり得ると思っている。

経済の活力を生み出すことと、創造都市のように質の高い人が集まる都市づくりということが重要で、そういう総入れ替えを考えても良いのではないか。

<可児政策企画部長>

我々も問題意識としてもっている部分で、重点戦略の中で、「創造」と「経済」をつなげてどういう経済戦略を構築するかという議論もしている。

<池田委員>

「創造都市」という新しい概念の都市のあり方には興味もあり、価値も高いと思っている。埋もれている芸術産業や資源を発掘してそこに人々が集まってくるような都市に転換し、それが教育やエネルギーなどにも質の高い波及効果が生まれてくるのではないか。

そういう意味で、「創造」の重要度を高めていくことをご検討いただきたい。「地域」はどこの市町村でも当たり前前に議論していることだと思う。

<内田会長>

私がもう少し若かったら同じような考え方を持っていたと思う。札幌市にとって、「経済」と「地域」はどちらも札幌市の弱点だと理解している。経済もさることながら、実は、地域の考え方が札幌では全く育っていない。

どういうことかという、札幌は非常に住みやすい街として、経済評論家なども評価しているが、札幌が住みやすいのは、地域に根付いた土着の札幌市民の匂いがいいからである。そういう意味で、札幌がクールでクリアなのは、そこに住む人の粘っこさがないからだと理解している。

札幌というまちをきちんとした形で整えていくためには、地域に根付いた人を育て、土着の札幌市民が育たないことには、地域でがんばれる人が生まれないのではないかと。そういう意味で「地域」というのは、単にコミュニティの在り方を論じるのではなく、そういう人を育てる考え方を明確にすることだと思っている。

<小林副会長>

今のご発言に対して一つ申し上げたい。

阿寒湖は、前田正名という今で言う経産官僚が明治政府と戦って、彼の考え方が政府に認知されなくて北海道に拠点を作った。彼は阿寒湖周辺の山林が禿山状態だったのを毎年1億円かけて、20数年間で自然林に戻していった。これは日本の中でも非常に珍しい事業だと思う。全国に前田歩園という拠点を作っていた。

前田正名は実は衣料メーカーの名付け親のようなもので、地域と経済を結びつけて動かしていく中で、「国是」と「県是」があって「郡是」もあるべきということは起点になっている。それが今のグンゼになっている。

前田正名はパリの市民革命の際にパリにいて、市民が市民自治を勝ち取った、社会システムが変わることを実感して、明治政府のシナリオとは別に、地域・郡がしっかりしたマネジメント能力を持つべきと主張して政府と対立してきた。

札幌に置き換えると、大きな政府が北海道、拠点である札幌を動かしてきた。それが当たり前のように感じて、市民はその舟に乗っていただければ良かった。

ところが、新しい政権であろうと、地域がしっかりと私見と責任を持ってマネジメントする動きが生まれ始めている。北海道、札幌がその中でどういう姿勢を持つか、問われているのではないかと。

今回は4次長総の次のバージョンの計画を考えようとしている。前の総合計画は地方自治法の中で書くべきことが決まっていたが、改正に伴いビジョンの部分、哲学は求められるがそれ以外は地域に委ねられている。それがこのビジョンの位置づけ、前提だと理解している。先ほどの郡是の話に繋がるが、地域がマネジメントする責任と能力、内容は何かを求められている。

札幌は将来の状態を考えても180万近くの人口を抱えることになる。これを一つの地域という概念で括ることは難しく、実際には歴史的な経緯も札幌の中だけでも多様に存在し、パッチワークあるいはモザイクのような状態であり、一つ一つの地域について議論することは難しい。ただし、一つ一つの地域が能力を持つことは別として、「地区是」「地域是」「コミュニティ是」のようなものを支える枠組みを作らなければならないと思う。

ただ、郡是があっても国是が否定されるわけではなく、その時に札幌市という小さい自治体が責任を持って何をやるのか、どういう責任を取るのかが選択と集中のもう一つの視点だろうと思う。地域是を求める議論をすべきで、経済も「札幌市是」のような枠組みで考えるものと「地域是」の枠組み

も当然違ってくる。

コミュニティひとつとっても区が 10 個ある以上に多様な状況が生まれている。それをどう意識しながら部会が議論を進めるかがこれからのポイントだと思っている。

一つのキーワードで 180 万都市の状態を語ることは難しい。多様に存在する地域を意識しながら考えていくことが必要なのではないか。札幌総体、つまり「札幌市是」を考えるよりも「地域是」が存在することを意識しながら、その傍らで「区是」も存在し、それぞれが担い手、地域の目指す方向が異なるということ意識しなければならないだろうと思う。

<星野委員>

これまでの経済とボランティアという枠組みではなく、ソーシャルビジネスのようなものを想定されているということであったが、それは前面に出すべきだと思っている。

先ほど、池田委員から「地域」と「創造・文化」の入れ替えという話もあったが、基本目標に掲げる項目を全て同列にすべきか、階層を明確にすべきか分からないが、中心を取り巻く 4 つの分野は経済や地域のための手段的な意味合いがあるのだと思っている。地域と経済が 2 項対立概念ではなく、これまでと違った発想、相乗効果があるのだということ盛り込んで頂きたいと思う。

もうひとつは、市民自治、地方分権のお話が出ている中で、行財政運営、共生の考え方が重要だと感じている。その中で、基本的視点の取り扱いがそれほど重視されていないように感じた。文章を増やせばよいということではないのかもしれないが、重点戦略を考える際にも、基本目標に立ち返る際にも重要な要素だと思うので、もう少し際立たせることはできないかと感じている。

<稲木企画課長>

ご指摘の点は重要だと理解している。地域と経済は相互に連携し、欠かすことができない重要な分野であると理解している。基本的視点の内容については、必要な内容については今後記載していきたいと思う。

<為定委員>

現状と課題から未来系、しかも完了形になっているのがどうかと感じた。読んだ市民から見ると、行政が全て手を加えていくように見えてしまう。

これまで以上に市民が参加し、痛みを分かち合うことで成立するものであれば、こうしていくということで記載し、自分たちのまちづくりであるという自覚を促すべきではないか。一緒になって進めていく必要があるということ記載すべきではないかと感じている。

<浅村計画担当課長>

ここは難しいと感じながら事務局でも議論している。従来からこういうまちを目指すという計画はあり、それが逆に行政のやることの意志表示に見えるのではないかという危惧はある。

多様なまちづくりの担い手が一体で取り組むことで将来像がこうなる、ということで敢えて今回の表現を採っている。バラ色に見えてしまうということであれば改めて気をつけたいと思う。我々としては従来の計画とは違うというものを発信したい、ということがある。

<内田会長>

文言だけの問題なのだが非常に難しいと感じている。はっきりと自分達が意識して、表現したものを根拠を持って書くべきである。これは大事な点なので事務局では必ず議論してほしいと思う。

<志済委員>

重点戦略を決める際に、為定委員のおっしゃっていた整理を並行的にしてほしいと思う。

我々のような民間企業は、一般に自社がどのような立ち位置にいるかを四象限に分けてSWOT分析をする。つまり「強み」、「弱み」、自社を取り巻く「機会」、「脅威」という内容で今後の戦略を立てる。

札幌市が徹底的に高めるべき強み、脅威や弱みといった、どうしても解決しなければならない構造的な問題、先ほど会長がおっしゃっていた「人の粘っこさがない」ということは、地域に隠された大きな課題だと思うが、これは提示されないと課題として認識できないものがある。

課題を羅列すると、課題解決型のつまらない計画になるが、強いところを徹底的に伸ばすための戦略は見えつつあるのだと思う。それにデータの裏づけを持って、重点化していく納得感を生み出していく必要がある。一方で特に札幌が解くべき課題は何か、そういうデータを持ちながらプライオリティを付けていくことが考え方の整理の上では必要だろうと思う。

<浅村計画担当課長>

強み、弱み、脅威等については色々な場面でデータを収集してきた。重点戦略の議論の中で適宜、お示ししていきたい。そこに札幌らしい特性が現れているとは認識している。

<近久委員>

基本目標の内容については結構で、どなたも異論はないのではないかなと思う。一方ではそれが何故かという、先ほど、「札幌市」という文字を取るとどの街でも当てはまるというのはもっともだと思えるくらい網羅されている。

こういう計画の中で大事なものは、街を作るときに市民が何を負担して乗り越えていかなければならないのかを記載すべきだということである。それをどこに載せるべきか、重点戦略の後なのか、あるいは目標の後に、「こういうまちづくりを進めるためには、市民がこういう覚悟を持つべき」などの記載をしていくことも考える必要があるか、議論する必要があると思う。

例えば、エネルギーで北海道、札幌の活性化、ビジネス化を図る際には価格の上昇も市民は受け入れる覚悟をしなければならないと思う。そういうメッセージを盛り込むのかも議論した方がよいのではないかなと思っている。

<内田会長>

そういうことを記載するというのは、審議会の案としては可能だろうが、市の案となったときには難しいと思う。

つまり、市の案となったときに市民に明確な負担を求める内容があることは、「行政は何もしないのに市民に負担を求めるのか」ということになり、この案自体が立ち往生してしまう懸念がある。考え方自体は全く正当なものだと思う。項目の中にそれとなく盛り込まれていることが妥当ではないか。

この計画が宙に浮いてしまうような事は会長としては避けたいと思う。ご指摘の内容は重要だが、内部で検討してほしい。

<服部委員>

進め方の確認になるが、具体的に札幌に何が求められるかは、現状では自分の範ちゅう以外には見えづらいところがある。部会の中で見えてくるものがあるかもしれないが、その検討を通じて基本目標にフィードバックさせることはできるのか。また、新まちの5つの政策目標と今回のビジョンの基本目標とはどういう関係にあるのか。

<可児政策企画部長>

フィードバックは可能かということについては、部会を通じて基本目標の内容について、より戻しがあるのは当然想定している。

本来は都市像から議論すべきなのであろうが、都市像を最初から決めることは難しいという判断から、基本目標、重点戦略を組み立てる中で見出していこうと思っている。そういう意味ではフィードバックすることは可能だと思われる。

3次新まちについては、4次長総に基づいた実施計画という位置付けになる。一方では市長公約をいかに実現していくかという意味での実施計画であるという側面もある。

今回の戦略ビジョンと3次新まちは期間的に一部被ってくるところがあり、どこかの段階で新まちはビジョンに基づくものとなり、その際には新まちも修正していくことになると考えている。

<内田会長>

資料2-2の表現の仕方を除いて、この枠組み自体には問題は無かったかと思われる。データや資料を基にするということであれば、それは追々ご検討いただけるものと思う。資料2-1については、大体ご理解いただけていると思っている。矢印に記載されているものが無理やりなところもあり、もう少し表現を適切なものにしていく必要があると思うが、今後の重点戦略の検討などを通じて適切なものに修正していくことになる。

(3) 重点戦略について

資料3-1～**資料3-3**について、事務局から説明

<内田会長>

基本的には部会で十分に議論されることになるかと思う。資料に概ねテーマが設定されていることでもあるので、自分が所属する部会以外の内容について、今の時点でご意見をいただけるとありがたいと思う。

各部会の所属委員については事前に了解をもらっているのか。

<浅村計画担当課長>

事前に各委員からご了解をいただいている。今回は重点戦略のテーマ設定に対してご意見があれば伺いたい。

<早川委員>

確認になるが、「想定される取組」については、たたき台であるという説明があった。それ以前の大きな項目として書かれている部分のテーマ設定の枠組みについても前提とせずに議論しても良いのか。テーマ設定についてはあくまで例示として理解してよいのか。

<浅村計画担当課長>

ご指摘のとおりで、これをベースにご議論いただくものとは考えていない。本日も含めて、このテーマ設定の是非を含めてご議論いただきたいと思う。専門部会のテーマ性として地域・コミュニティに関わる部分、経済・雇用に関わる部分、都市構造に関わる部分として捉えているが、各部会の中で効率的な議論を行うためのたたき台としてご理解いただきたい。

<池田委員>

「次世代を担う」ということと「未来を切り開く人材」の整合性が今一つ分からない。次世代の中に「子育て世代を支援する社会システムの充実」が組み込まれるのか。

例えば、次世代を担う教育体制、能力開発などがいくつかあって、その一つとして子育て支援というものもある。こういう部分も含めて、もんでいく必要があるのではないかと思う。

<浅村計画担当課長>

アプローチの仕方としてももう少し戦略的、分かり易いものがあるのではないかということだと捉えているが、部会の中でご議論いただきながら検討していただき、その上で修正を加えていきたい。

<池田委員>

私個人としては、全体を捉えると会長がおっしゃった「土着」ということも含めて人材育成は非常に重要な要素の一つになると思っている。もう少し全体を捉えた中での次世代の人材育成ということで考えてほしい。

<杉岡委員>

少し補足しておきたい。基本的に地域づくりでは、ポイントは地域の仕組みづくりであり、次世代というのは人づくりが重要で、そのための体制や教育、ネットワーク形成、地域の組織化の仕組みが含まれてくると思っている。なるべく包括的に捉えることとして、さらには次世代を担う高齢者の役割も考える必要があると思っている。

<福士委員>

私は地域・コミュニティ部会に属することになるが、経済・雇用部会の中でご議論いただきたい点がある。

180万人の人口を抱える札幌市として、市民の意識にある住みよい環境ということに持続性を与えていくためには、財政的な工夫も求められると思う。最近の行政のやり方として「金を削る」が念頭に置かれていると理解している。発想を変えて何かを興しながら税収を増やしていく、そういうこと

が、小林先生がおっしゃった「地域是」というものを考えるのであれば、市民のレベルアップを睨んでいくとそろそろ出していく必要があるのではないかと。除雪一つとっても、150億かけて苦情が出るような状況ではなく、多少のことについては自分の手を動かしていく必要性、発想があるということは意識してほしいと思うし、そういう議論をしてほしいと思う。

<内田会長>

経済・雇用部会の部会長としても、私に向けての投げかけになっているかと思うので、おっしゃられた点も踏まえて議論していきたいと思う。

今後、それぞれの部会でご議論いただき、内容を詰めていくことになるかと思う。各部会での議論の上で、良いものを作っていただきたい。

<田村委員>

一つには、去年の3.11を踏まえた災害対策、減災をどのように取り扱うことになるのかが気になっている。時代の流れから言うと、安心・安全があつての地域・経済だと思う。札幌として、どこまで頑張るかというメッセージが必要になるのではないかと。

もう一つは、基本目標の実現にあたっての基本的視点として書かれているもののうち、「北海道の中での札幌の役割」については、各部会でどこまで議論するのが重要なのではないかと考えている。それについては共通の話題性をもって議論すべきではないかと思う。

<浅村計画担当課長>

防災・減災の観点については市の内部でも関心の高いものとなっている。それぞれのテーマの中で議論すべきかと思うが、特に関係の深いものとして、地域やコミュニティの役割、都市構造としてどういうデザインをすべきかということが主な論点として考えられると思う。それ以外にも防災という観点が論点として出てくるのは十分あり得ると思うので、部会の枠組みに捉われずに議論していただければと思う。

北海道の中での札幌の役割についても、地域コミュニティ、経済、もしくは都市構造、それぞれの分野でそれぞれの論点があるかと思っている。そういう意味では基本的視点として共有できるものとして取り扱っている。これを意識して十分に議論することが今回のビジョンの役割でもあると思っている。

<内田会長>

田村委員の逆のことを考える必要もあると思っている。つまり日本全体、世界全体の中での札幌市のできることに、貢献できるものを各部会で検討してほしいと思っている。これから全てが世界的なツールで動いていくことになる。そういう視点を持ってほしい。

<小林副会長>

それぞれの部会で現状、課題を資料として作ることになると思うが、内田先生がおっしゃったように日本の中での札幌にとどまらず、アジア圏の中で北海道の中心都市である札幌の役割は大きいと思う。

中国ではどういう地域戦略を採っているのか、韓国はどうか、そういうリアリティがなければ札幌のあり様、戦略、つまり「市是」に当たるところは描ききれない。近隣、地域という視点と同時に、もう一つの広い視点で資料を作成していただきたい。

例えば、中国本土ではないが、華僑が札幌市に投資しようとしている実態がある。オーストラリアも札幌近郊で戦略的に動いている。そこと10年間、どういう風に呼吸をしていくかが重要ではないか。これまでとは全く違う枠組みで考えることになる。しかしながら、札幌市のスタッフの方とお話してもそのあたりのリアリティが窺えないと感じている。

<浅村計画担当課長>

グローバル化への対応はこれまでも審議会の中で話題に挙がっていた。基礎自治体が取り組む外交戦略、つまり世界とつながるための戦略や施策の展開が必要になっていると思う。それがここで掲げるべき国際戦略になっていくのだと理解している。そうした議論に対してリアリティのある話題を提供できるよう資料作成に努めたい。

<池田委員>

つまらない話になるかもしれないが、それぞれの部会の名称には苦勞が窺える。経済・雇用部会に属することになるが、これまではあまり雇用に関する話題がなく、創造・文化というテーマから経済や雇用についての課題が挙がっている。もう少し柔らかく、「札幌の経済って何？委員会」というものでも良いかと思う。

<可児政策企画部長>

名称については、各部会の第1回で改めて決めていきたい。

<内田会長>

池田委員のご指摘は、計画が左から右に流れるとイメージが変わるということに対してのご指摘だったかと思う。持っているイメージが膨らまない形は避けるべきということがネーミングにも関係してくるのではないかな。

<田村委員>

基本目標から基本的視点、重点戦略へと、今までは絞り込むような形で議論してきた。我々はあくまでも計画を作っているのであって、やがての評価を意識して、その指標を作るために内容を削っていく作業になってしまうのではないかという懸念がある。各部会の中から、大いに横幅をもってテーマに重なり合いを持たせ、他分野の話まで膨らませていくことによって、初めて奥行きが出てくると思う。議論・テーマを削っていくべきではない。

(4) 都市像について

資料4について、事務局から説明

<可児政策企画部長>

補足になるが、新たな都市像のたたき台については、キーワードの組み合わせに過ぎず、これを案としてご提示しているわけではないということをご理解いただきたい。今日、ご意見をいただきながらたたき台を作成していきたいと思っている。

<内田会長>

これは部会に持ち越さない議論なので、ここで議論したいと思う。ほぼ、センスの問題なのだが、ご自由に意見を頂戴したい。

<早川委員>

都市像、キャッチを公募するというのはどうなのか。計画を市民に親しみのあるものにするためにも、計画の内容をお示しした上で、キャッチを考えていただくというのはいかがでしょうか。

<可児政策企画部長>

都市像について専門家の皆様にご意見をいただき、それを像として考えていく作業を進めていきたいと思っている。一方では、どういう都市像を目指すかということをお示ししながら、コピーとして市民から募る考えもあるかもしれない。

<池田委員>

土着の札幌人として、子どもの頃は市民憲章があり、今見ても素晴らしい内容だと思っている。為定委員のおっしゃっているように、古いものを見ながら新しいものを目指す上で、市民憲章を一度、皆さんにご覧いただきたいと思う。

<内田会長>

募集すると、出てきた中から選ばなければならないということになるので、難しいのではないかと。どうやって市民の声を聞いていくかはやり方を考える必要がある。何も出てこないというのは、結局、都市像を描ききれていないという状況によるものなのだと思う。池田委員のご発言は象徴的なものではないか。

<可児政策企画部長>

最終的に全部決まれば良いと思っているので、重点戦略のご議論を通じて都市像をいかに描くべきかを念頭においていただければと思う。

<梶井委員>

都市像としては、「失敗しても大丈夫なまち」というニュアンスを大事にしてほしいと思う。夢を持ちましょう、チャレンジしましょうといっても、若い人は失敗を恐れてチャレンジしきれない環境にあるのではないかと。

<志済委員>

ソウルの「一流都市」、インドの「インクルージブな成長」はそのとおりになっているという点で

はすごいなと思う。札幌もそういう像を持つべきである。

今回の議論では「創造」というキーワードが出ている。そういう意味では「創造性」、「クリエイション」というのは重要なキーワードだと思う。一度出した以上はそうなるために努力しなければならない、そういう都市像であるべきなのではないか。

<田村委員>

個人的には「植民地からの脱却」というイメージを強く持っている。北海道の定着という話がようやくしっくりくるような世代になった。イギリスにおけるインドの反逆のような、そういうメッセージ性はほしいと思う。

<内田会長>

今の内容は温和な表現で言わなければならないので非常に難しい。言葉そのものよりもどういう感覚を持つべきかということが重要である。

<小林副会長>

都市の質を表す都市像と国内外に発信する都市像となっているが、例えば、両方にクロスして考えられることとして、札幌が将来どういう規模になっていて、どういうクオリティをどこに発信するのか、今回提示されている事例の半分は行け行けどんどの事例である。こういうものを意識したいということなのか、それともスイスのような都市を意識しながらメッセージを出すのが重要なポイントだと思う。

例えば、3. 1 1以降、中国からの観光客が減少し、またここ数ヶ月で復帰しつつある。そういう世界がある中で、札幌はそことタグを組んでいくつもりなのか。

国内についても、「創造都市」と言ったときに札幌はトップランナーではないので、他都市に比べると札幌はどうかと思う。ユネスコに指定されれば良いという程度のものではないと思っている。

一方で、大阪はキャッチフレーズだけでなく、教育システム、企業を含めた大きなシステムを作っている。横浜でも昨年、創造都市の世界会議があった。

そういう意味では、札幌も創造都市に対して大きなビジョンを持ちながら計画の中でやる気も含めて謳っていかなければならないし、そういう深い議論が必要な状況にあるのではないか。「環境首都」についても同様だと思っている。

<可児政策企画部長>

「創造都市」と「環境首都」。特に「創造都市」は概念的で職員間でも浸透していない。これからの経済戦略のキーワードになり得るといっても踏まえると、どうやって市内、経済界を含めて盛り上げていくかが大きな課題だと思う。

<内田会長>

小林先生がおっしゃっているのは市が相当の覚悟を持つ必要があるということである。もう一つの方は内外に向けて、東京経由で間接的ではなく、札幌が直接世界に繋がるということで、これはやり様はあるのではないかと考えている。

前者の方は相当の答えがないことには、小林先生も納得されないのではないか。事務局はよくお話するように。懸賞論文で答えを探すのではなく、メッセージを決めたらその覚悟を持って進めてほしいということである。

本日の予定していた内容は以上である。

<可児政策企画部長>

今後は重点戦略について専門部会に分かれて議論していただくことになり、6月に開催予定の第5回審議会で各部会の成果についてお知らせしたい。

<内田会長>

それでは、本日の審議会は以上としたい。

以上